抒情の終焉（ある青年）

志賀直哉讃

己の蒼白な弱さに銀の刃（やいば）を当て
すいと軽く引けば
紅（くれない）の血は半球をなして盛り上がり
そしてぽろりとこぼれ、肌をつと下る

見つめる目の周りに緑の斑点
砂模様の幕は私を包む
この頭はふわりと宙に浮かび上がり
私はなおも倒れずにいる

ついに誰も分かってはくれなかった
そしてまた、己の弱さ故
自ら断罪を下す時は来た
もう堪えられない、立ってられない

げっそりやつれた肉塊とねばねばした皮と
目だけがぎらぎらと飛び出た顔に、もう
もうとても堪えきれなかった

私はやっとのことで立っていた
もう堪えられなかった・・・

(1982.5.7)